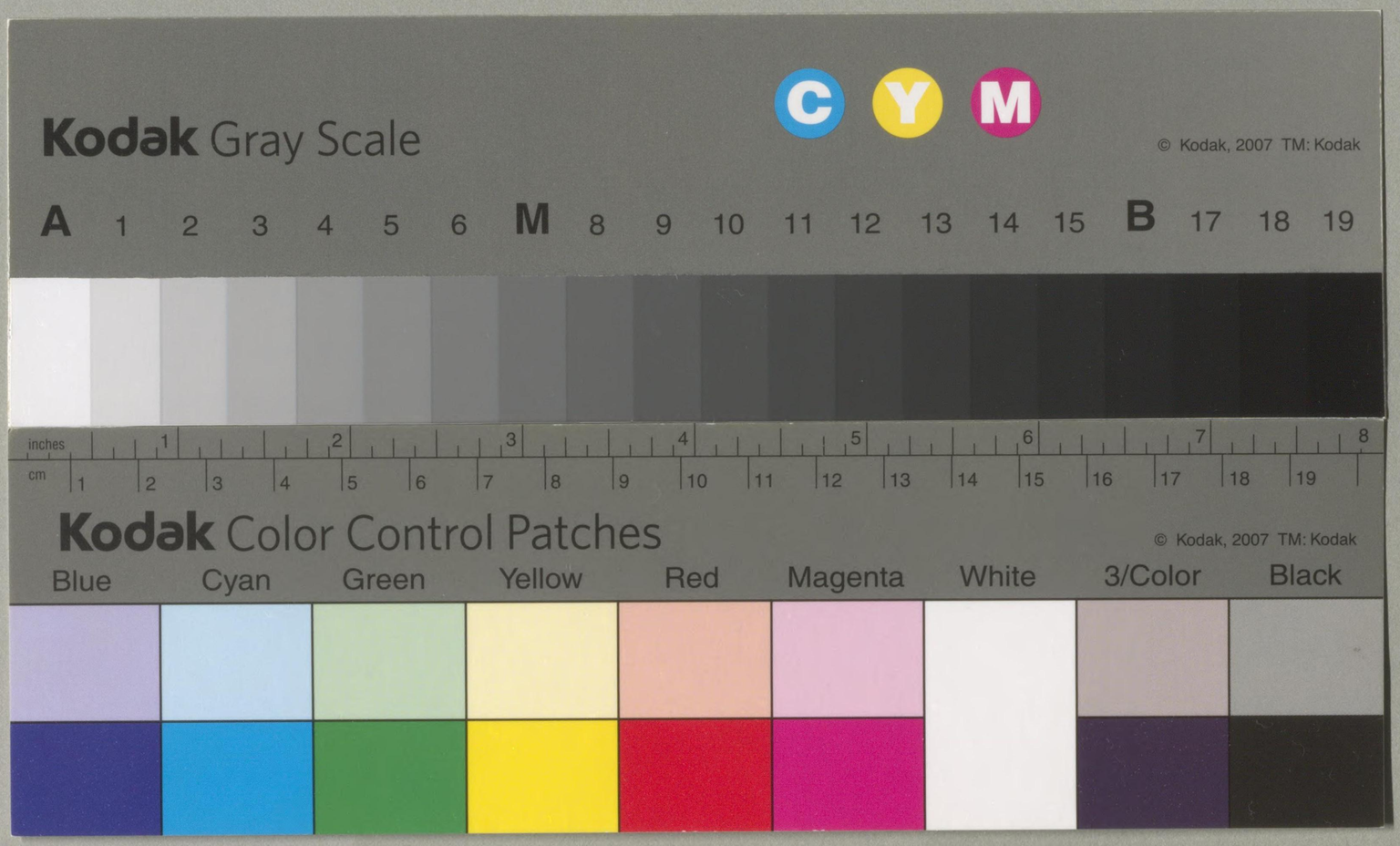
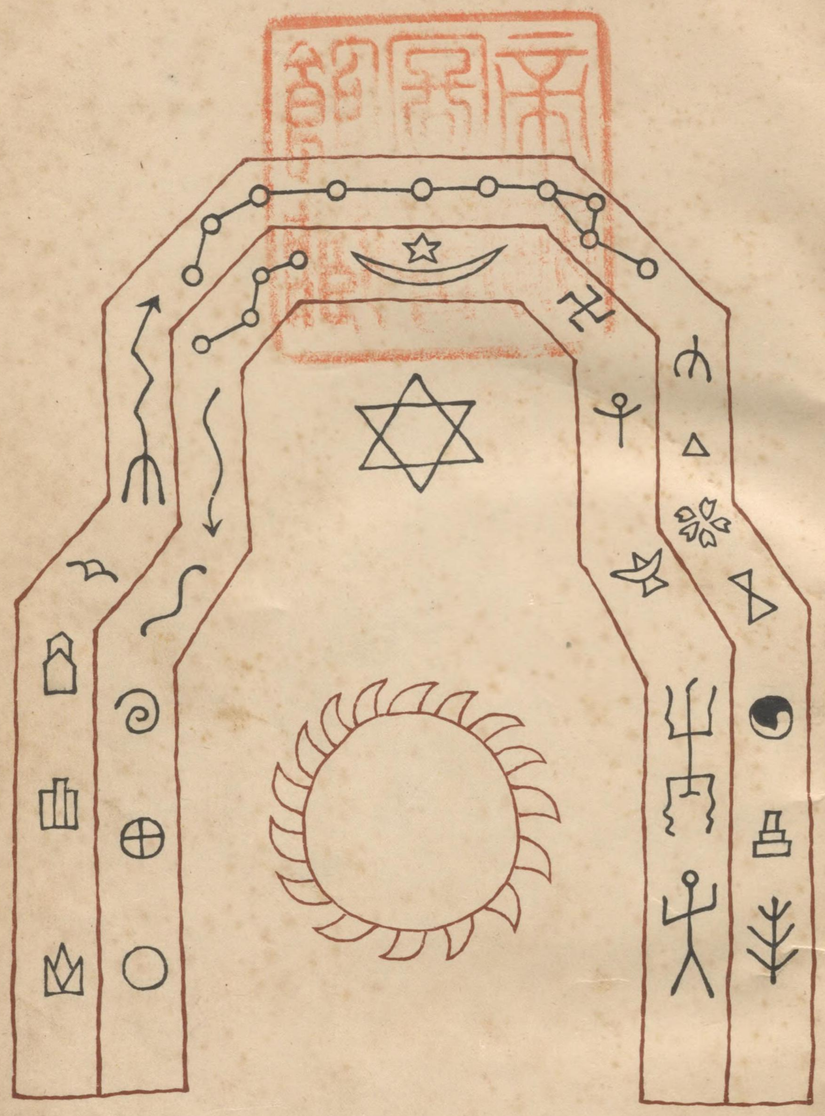

Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

349 280
T

349-280



大正
3. 4. 15
内交

TO

この草書一巻を服部杢三郎氏にをくる

それは歴史家ばかりではない。「どこで御修行になりました。誰におつきになりました」とか、第一に誰でもが私にきくことである。私はたゞ笑つてそれに答へる外はない。

空ゆく雲、野の草、路傍の行人、卓上の磁器、それ等はいろ〳〵の意味で、私を教へないものは一としてない。みんな私の「自畫像」の背景になつてゐるのである。

私の記憶にも、私は三歳の時から筆を持つて馬の繪を畫いた。六歳の春、村の小學校へ上つてからも、私はお清書のかはりに馬の繪をかいて先生にだした。

何か子供の心に靈の交感をもつてゐるやうに見える、あの人なつかしいまなざし。感覺的な線の豐かなあの四肢。力があつて品の好いあの首ののび方、脚の形。感激的でしかも純撲な馬は、いちはやく敏感な少年の對稱になつてゐたのであろう。

馬といふ思想を發想するために、馬といふ文字よりもはやく「馬の繪」を書いたのであつた。

私はまた馬の持つてゐる匂ひが好きであつた。馬のした尿の匂ひに堪へられない感能の好尚を持つてゐた。私が馬を好む如く、どんな馬でもまた私にすぐ馴された。私は馬の柔かな鼻に頰をよせたり胸のあたりのむつちりと發達した筋肉にさはつてゐる瞬間は、私の躍り狂ふ血液は、幸福に熱しきつてゐた。私は馬の腹をくゞつたり、首にしがみついたり、いながみにぶら下つたりして、すべての官能を充さうとしてゐた。

それは情操の發達の早い少年の、性のあらはれの一つであつたのであろう。

それから意識して、自然を表現する方法について考へたのは、高等小學校へ上つてから、鉛筆畫を習つた時からであつた。もし、さういふ方法を敎へるのが「先生」といふものなら、その頃、私に鉛筆畫の初歩を敎へて下さつた服部先生が、私の最初の先生であつた。

先生はいつも敎科書はそつちのけにして、生徒を敎場の外へ出して

は、校庭の蘇鐵や、海棠の花や、靴や、宮の鳥居などを寫生するやうに命ぜられました。先生は、どういふ風に切取つて畫くか、どういふ風に陰影をつけるかについては、一として教へては下さらなかつた。いつも怖い聲だらけの顏から、鋭い、しかしながら、どこかなつかしいまなざしで、稚い天才のおぼつかない手ぶりを見てゐられました。

先生は、いつも私の繪には、フルマークを與へて下さつた。けれど曾て一度も、私の繪が、どういふ風にうまいとか、好いとかいふことは一言も言はれたことはなかつた。

小學校を卒業して、いよ〳〵母校を出る日に、長い間世界の地理や歷史や、大和魂などについて教へて下さつた先生達は、卒業してゆく生徒を一人づゝ膝もとへ呼出して、將來の希望をおたづねになつた。

つね〳〵先生は、「人間は、志を立てねばならぬ、そして理想を建てゝ進まねばならぬ」と教へて下さつた。けれど、私は理想もなければ、志も立てゝゐなかつた。

涙が咽喉へこみあげてくる。

「先生、わたくしは、何になるのだか知りません。父は、親のあとをついで酒屋をさせるつもりで、私を神戸の商業學校へおくるやうに言つてゐます。母かたの老父は、私をエカキにした方がよかろう、と言はれたと母が申しました。私は、どうすれば好いのだか知りません」

さう答へて、私は顏をあげて服部先生の顏を見ました。先生は、何も

仰らなかつた。

それから私は、いろ〳〵な學校へおくられたけれど、やはりエカキになつた。

今にして思ふと、先生は、松の芽はやはり松になるのを、とくに知つておられたやうに思はれる。

さうした意味で、服部先生は、私の最初の先生で、また最後の先生であつた。

先生は、今もなほ、私の鄕里で、稚い天才の芽をはぐくしむでおられる。

草畵について

この本は、さきに出した繪手本の後編として出すつもりで作畵したのだけれど、どうも繪手本といふ名にふさはしくないやうな氣がするので「草畵」とした。だから取材はなるべく多方面にと思つて、人間の生活狀態に多く興味をもたせてあるので、こうしてまとめて見ると取除きたいやうないやな繪もないではないが、内容まですつかり變へる時間がないから、今はこのまゝにしておく。またいつか、ほんとに私の名づけた意味の「草畵」を發表する機會もあるであろう。

こゝにいふまでもないが、草畵が、日本において、造形美術の上に

確然とした一の分野を持つたことは事實である。私が雜誌へ俳句や短詩を別な表現のしかたで發表したゐた頃、日本では木版畫は、まだ、俳句や川柳の書賛のやうな、極輕るい行き方か、または無自覺なおもひつきの諷刺畫か、さもなくば無意味なスケッチに過ぎなかつた。それ以外に、油繪やその他でやつてゆく第一義の藝術的な內容を、この小いさな木版畫に盛つてゆくといふことは、てんで考へになかつたことであつたらしい。

今はさうではない、和歌や詩の短い文の中から大きな自然や人生を見ることが出來るやうに、この小いさな木版畫があらゆるものを、自覺的に發想するやうになつたのは愉快なことである。

紙や、筆や、版木にかなり古い歷史をもつた日本人が、かうした藝術品を世界へ出すことに非常な興味をおぼえる。

私の「草書」が親友恩地孝四郎、久本DONの二氏に負ふところが多いことを、こゝに言添へるのをうれしくおもふ。

讀みかへしてみると、私は、いつも草書の集を出すたびに卷のはじめに、今は心にしみないが、この次こそ好いものを出すつもりだといふやうなことを度々書いたのに氣がつく。いつでも書いてゐる時は、さうはおもはないが、版になつて私の手もとにきた繪をみると不滿足な點がしきりに氣になる。しかし、きつとこれから好いものが出來るといふ氣がする。まだ〳〵ちつとも俺は俺のものを書いてゐない、と

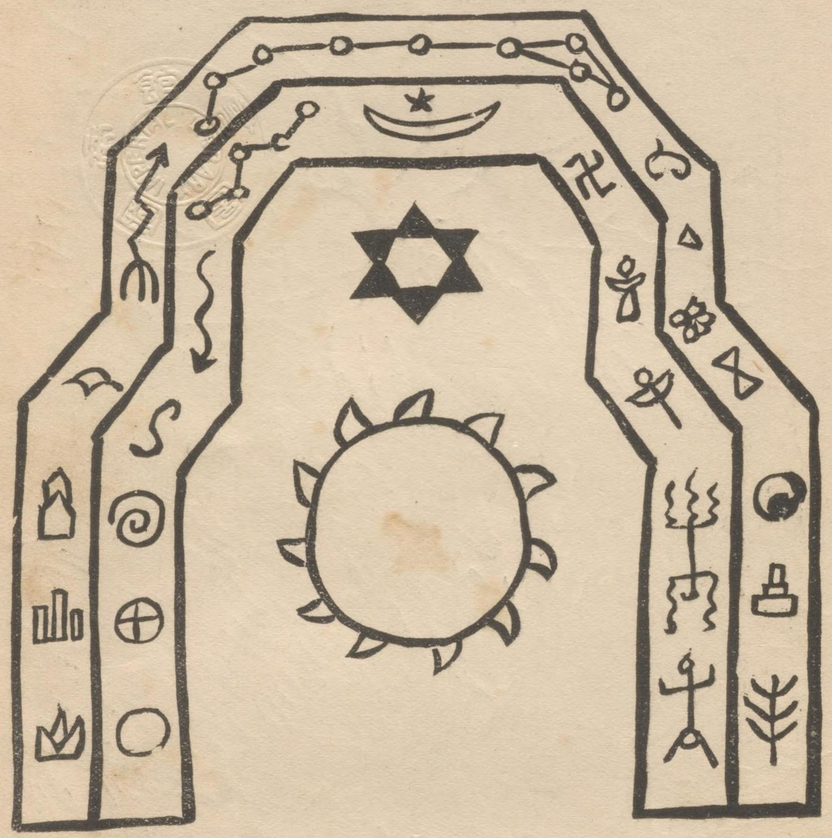
草畵

竹久夢二作

いふ氣がする。書いたものは氣にいらないが、これから書くであろうものには多分な望を持つてゐる。それはまづいとかうまいとかいふ意味でないのは勿論である。

人のかいた繪を見てもさうであるが、作者に交渉のない貧しい繪をみると、なさけなくなつたり、腹立しくなつたりするが、好い繪を見ると、もうわけもなくうれしくなつて、これが俺だといふ氣がして、恰も自分がそれを作畵したやうな豊かな心持になつてくる。戀する男が、自分を女の心の中から求めるやうに、好い繪から私の「自畵像」を見つけ出して、私は私を知つてゆかねばならない。

——夢二——



WORLD-IDEAS

灯ともし頃

夕

はしら

番町の家

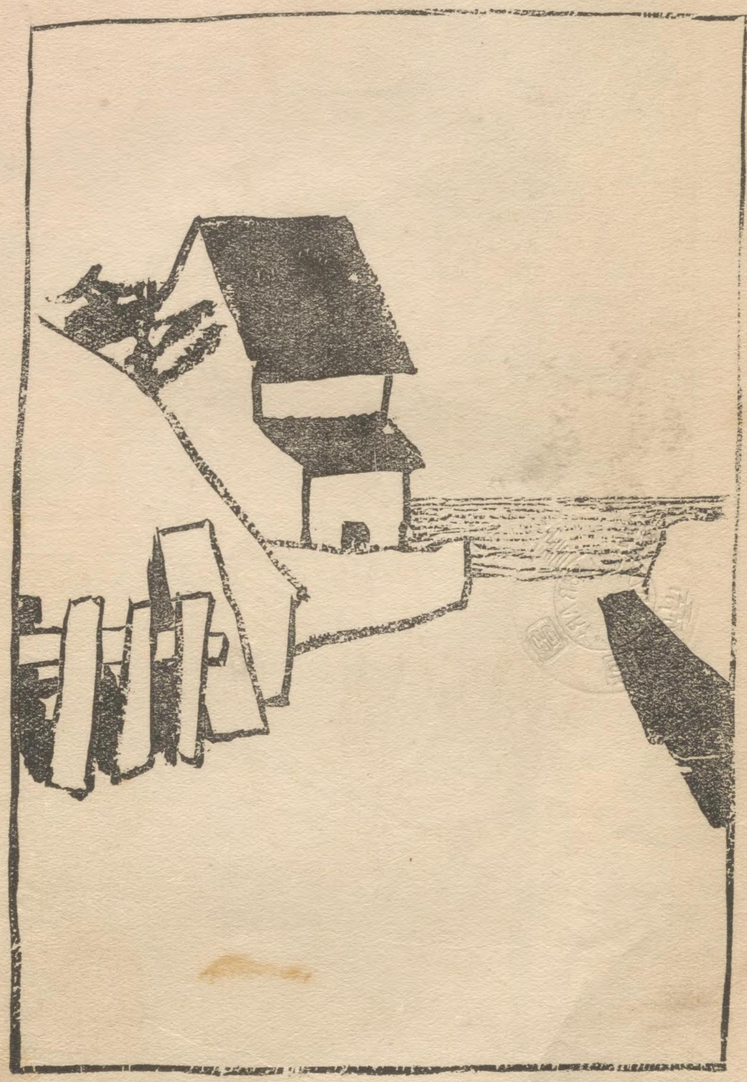
よこはまみなとうち

雪のふる立日

いちばん

丘のはて

YORU



濱の別荘

黄いろい光り

浅草

古駅の春

砂丘

BANKI

やみあがり

KOBE

夜汽車

あらし

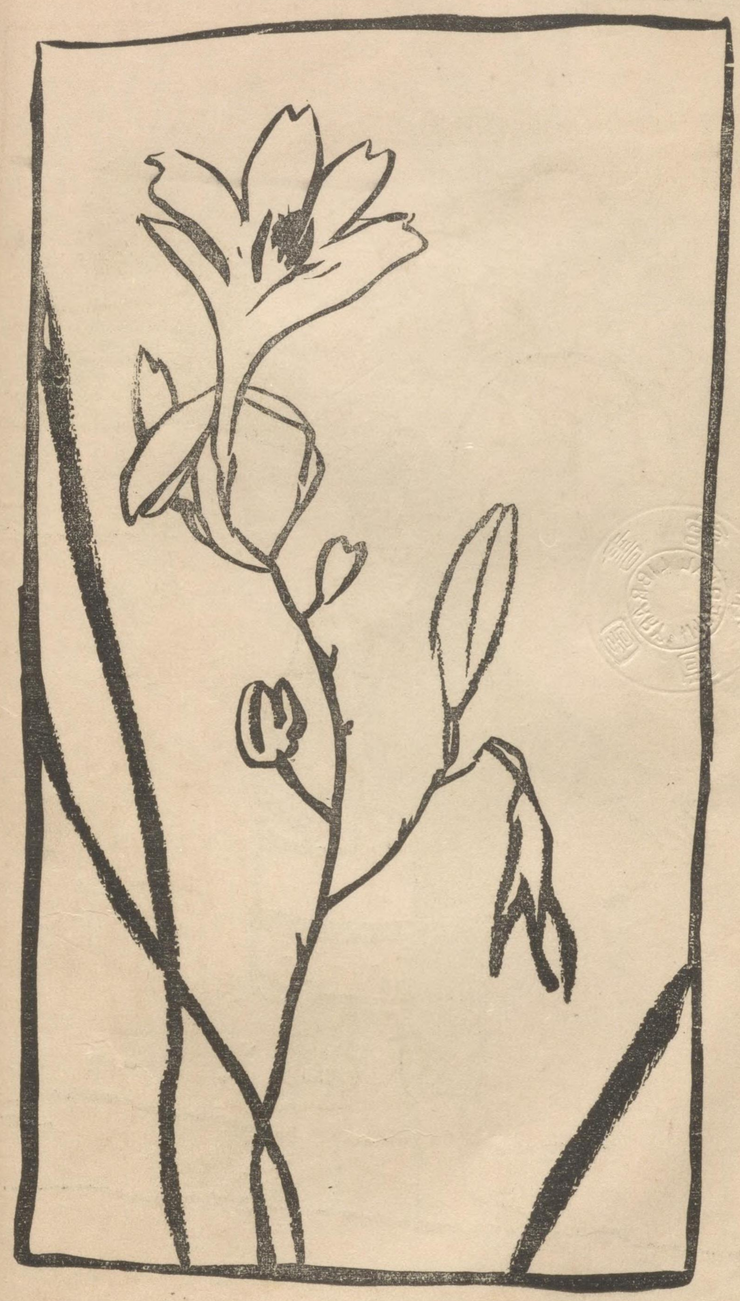
足袋をはく女

井の頭

種をまく男

木の実を拾う子

兎をこしらえる人



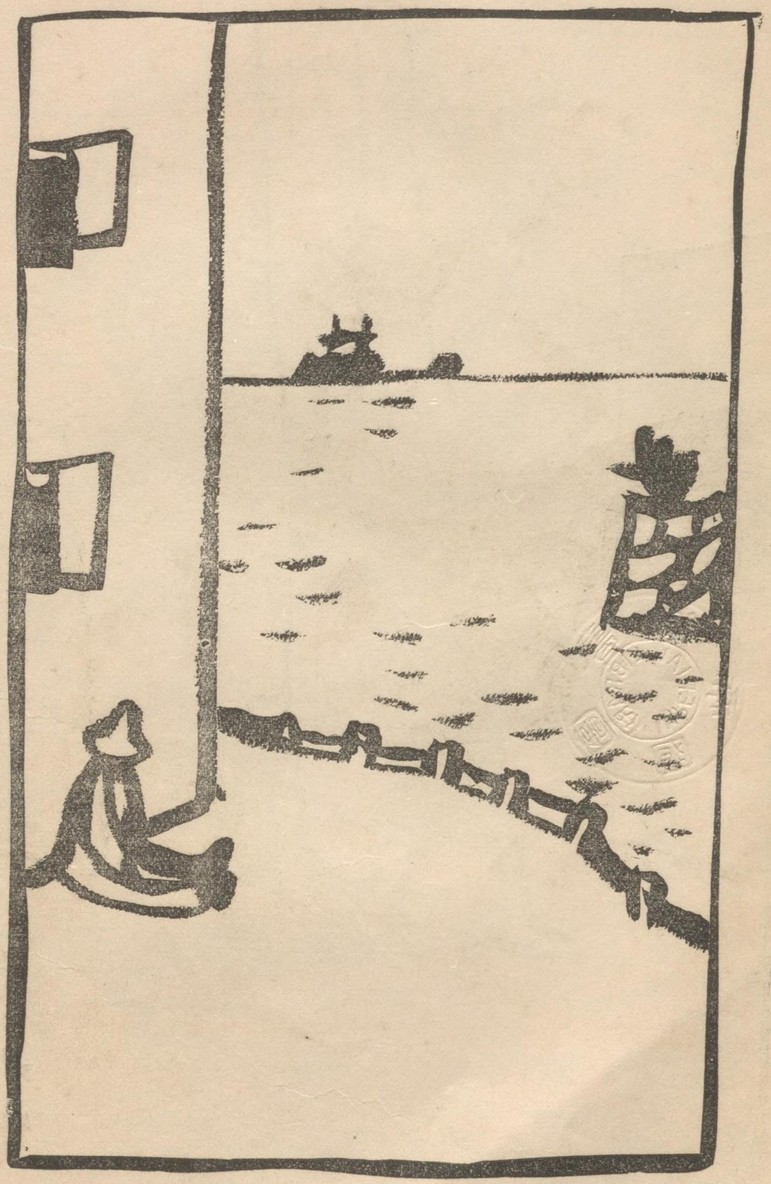
山を崩す人々

ロシヤの旅人

青きリンゴ

カイロの水売

夜のをんな

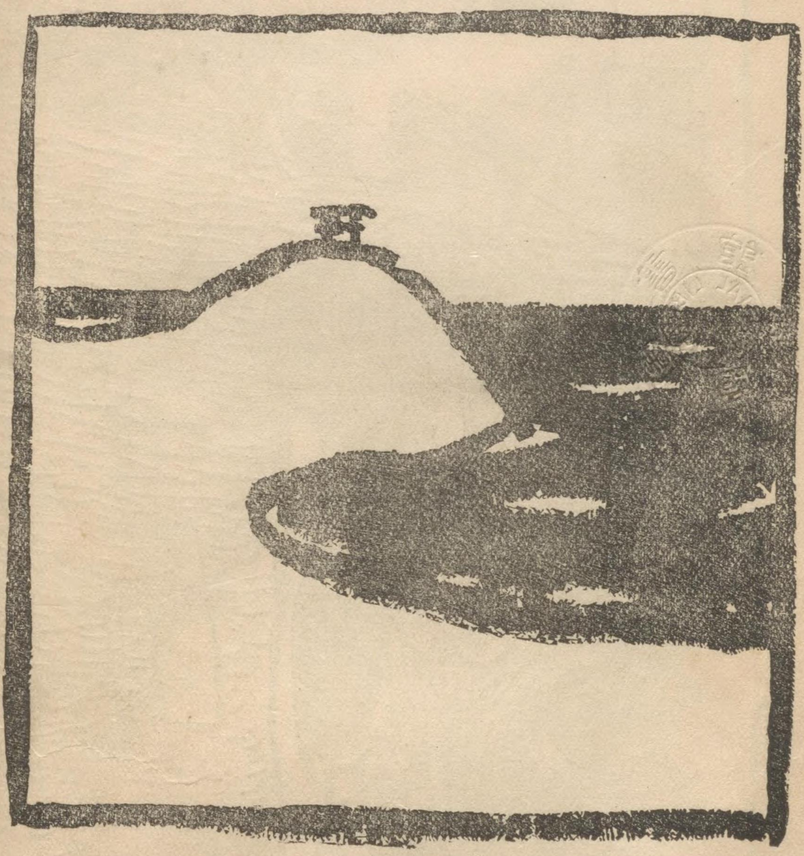


よこせよ

さくら

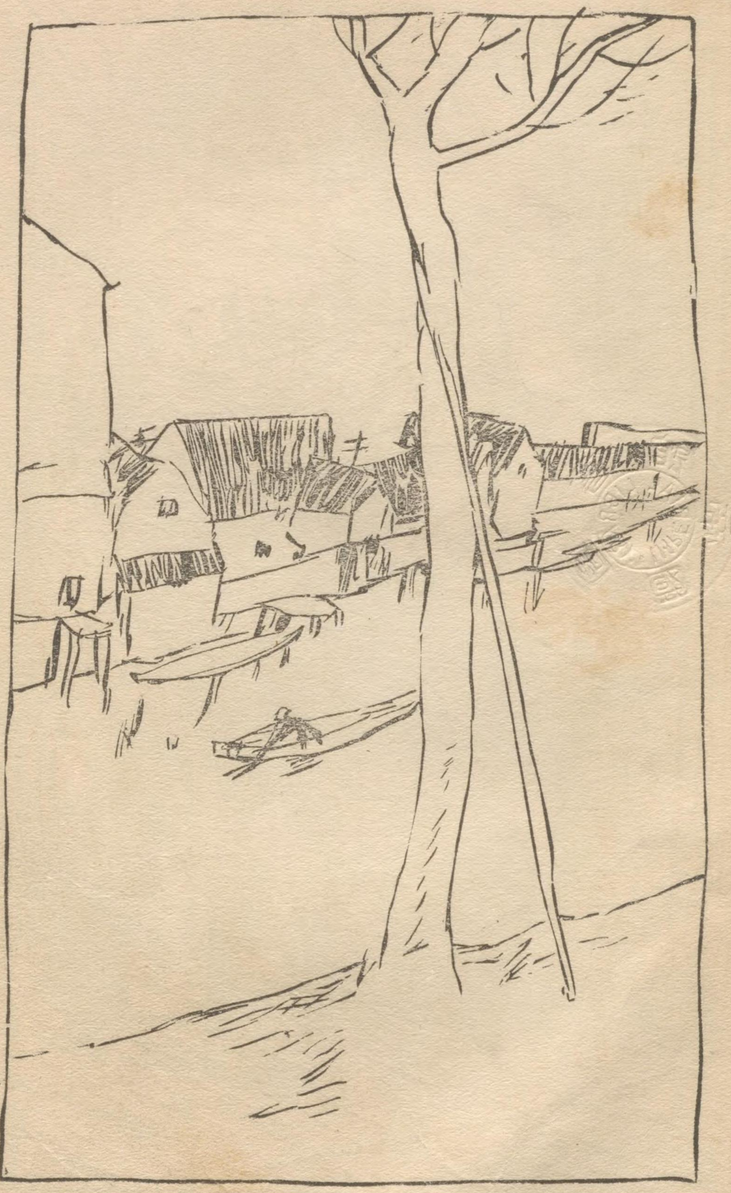
五月

合歡の花



僕の人那支る帰へ国

ひるさがり



青いきものをきた女

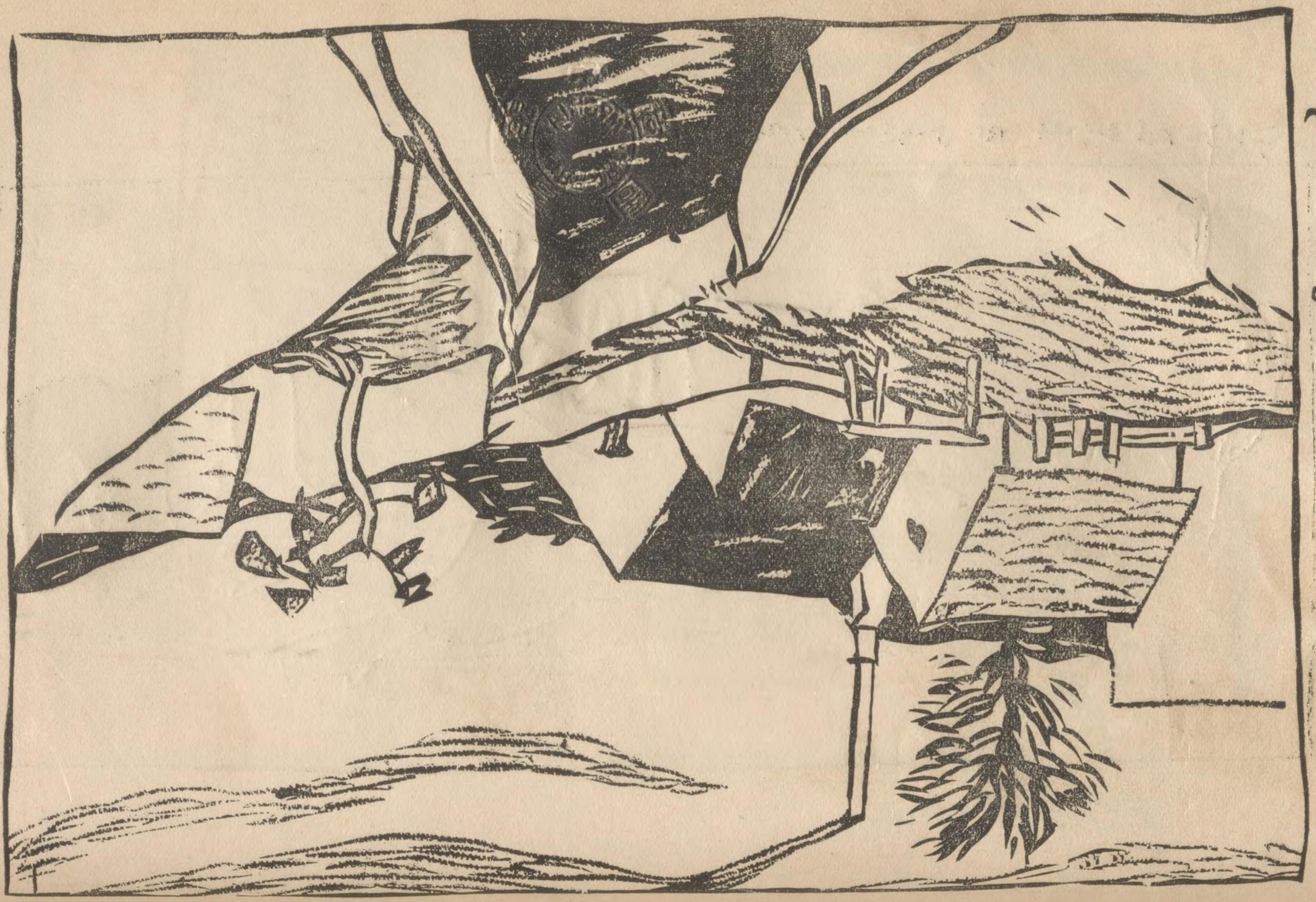
街のあき

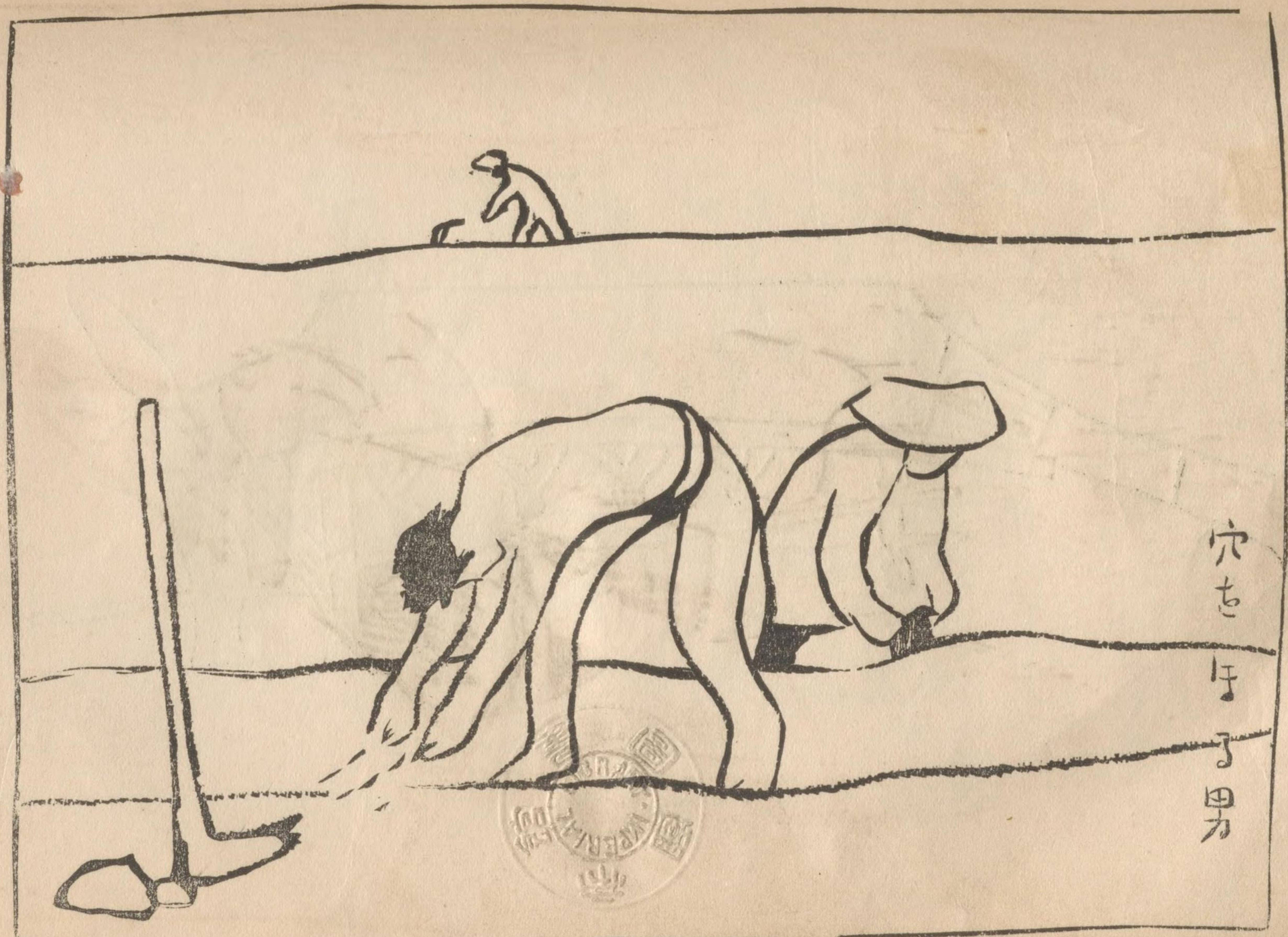
朝まだき

踏切の番人

金曜の朝

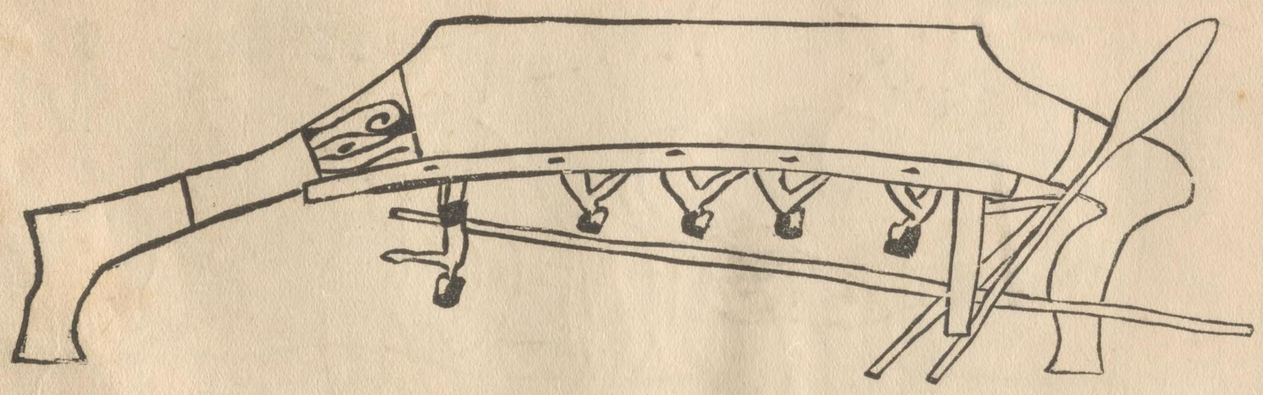
さようならとするをんな





穴を掘る男

埃及に旅する亞細亞人

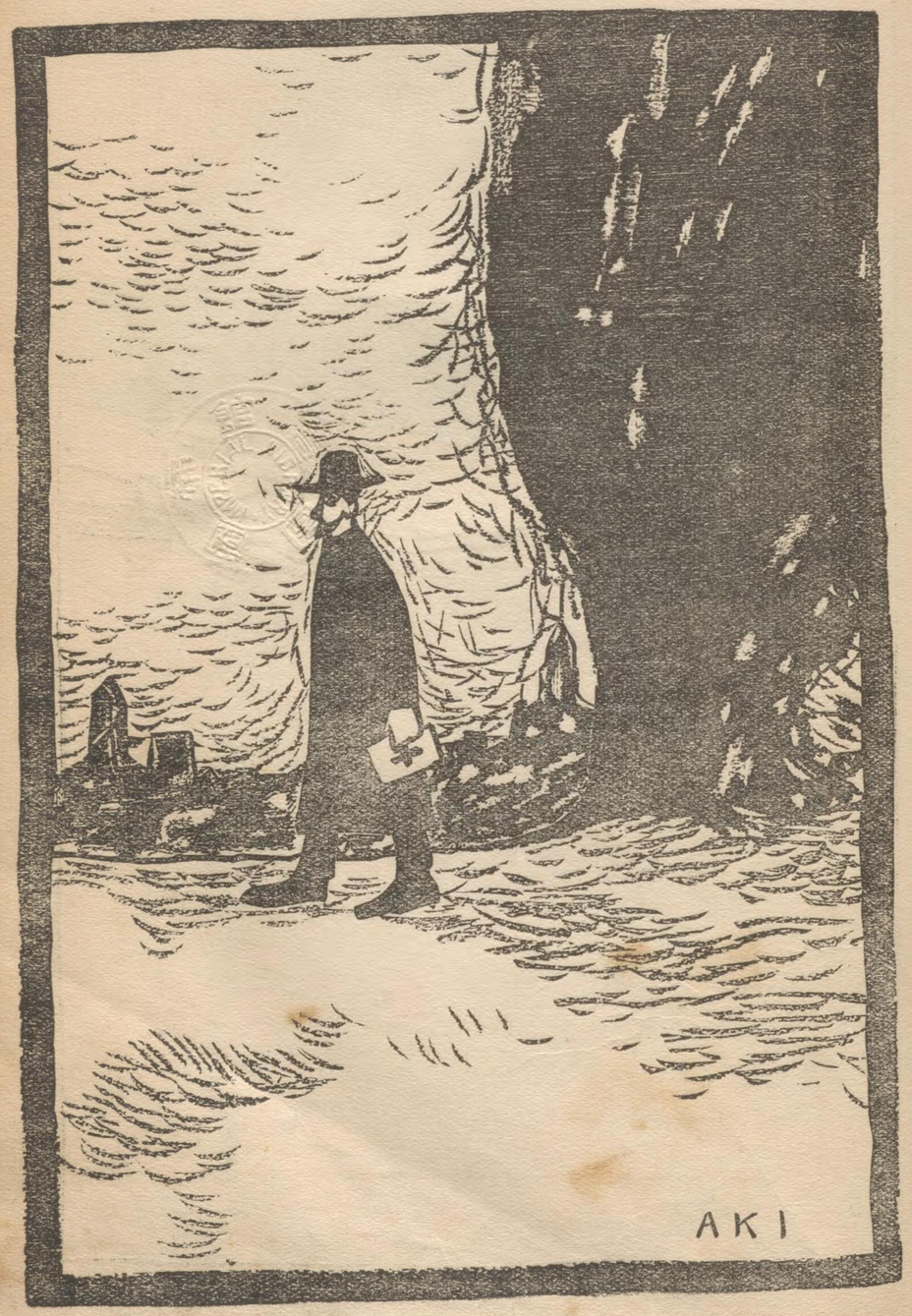


埃及 土耕式船

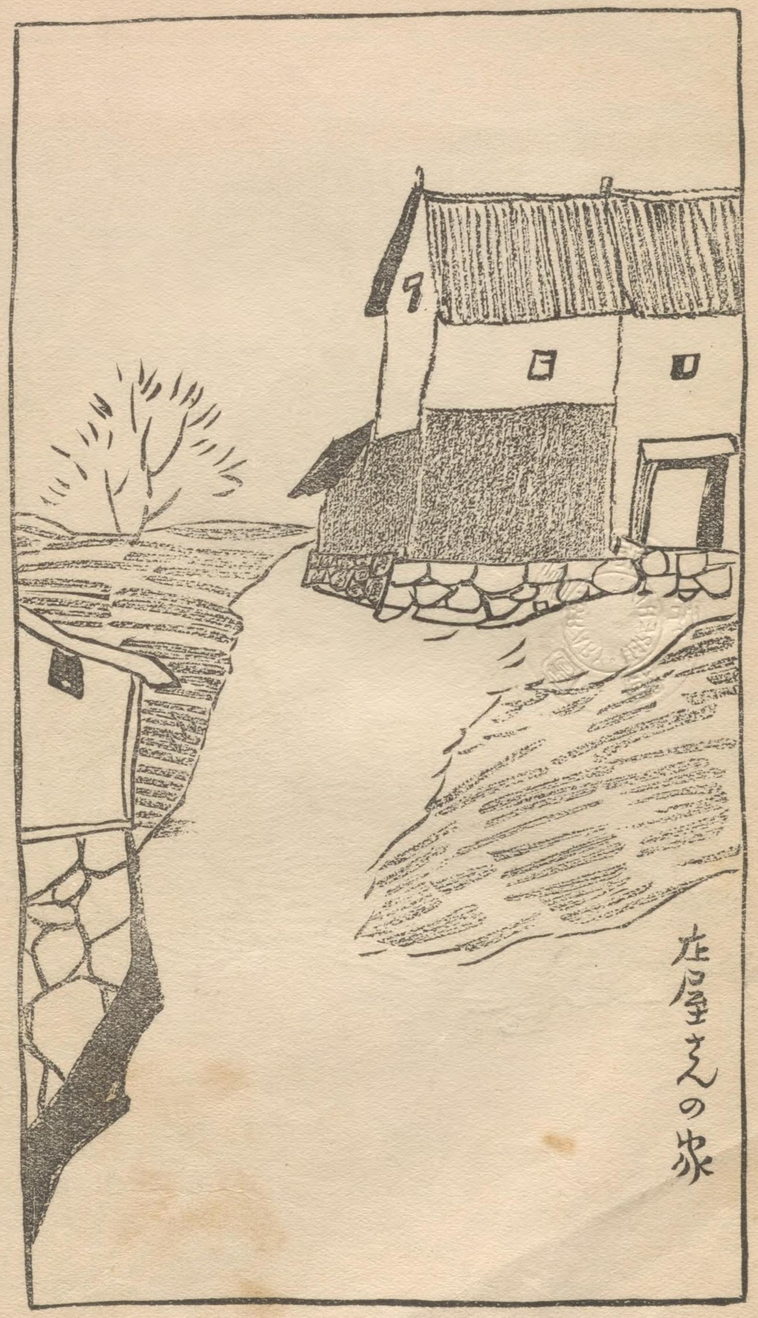
白 [illegible]

カフエーの卓

湖畔の村



AKI



左屋さんの家

キユラリオ

夜の船

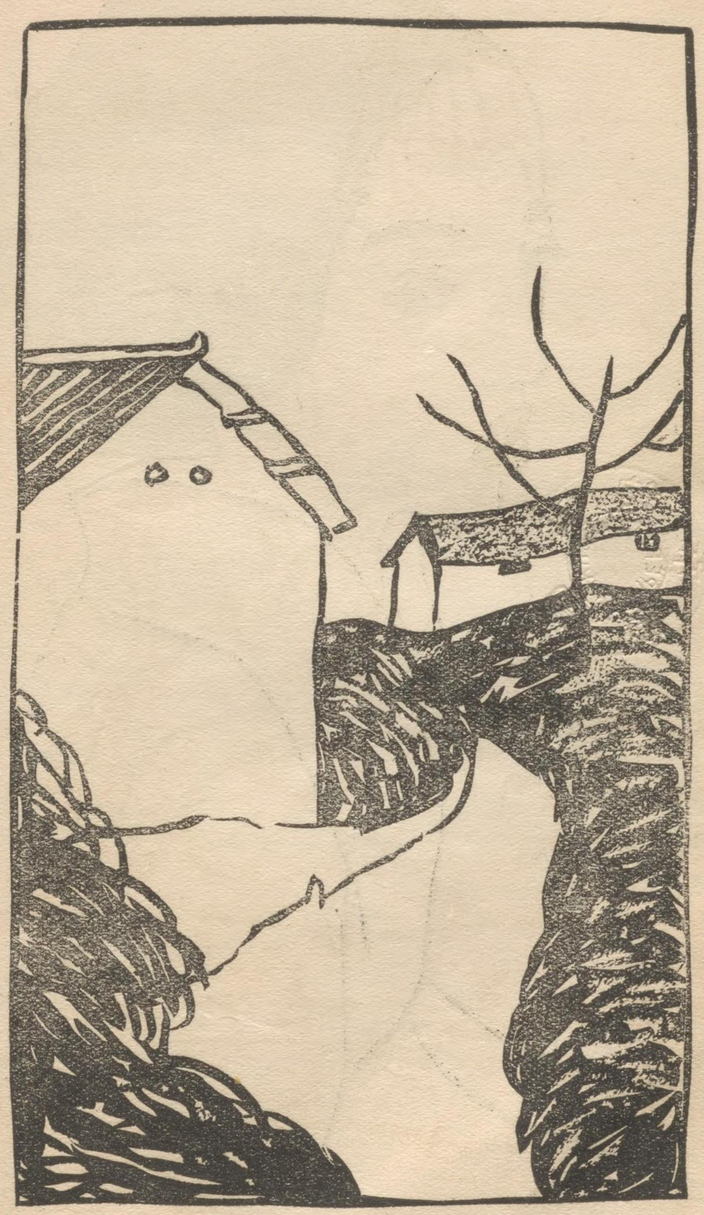
夜のあおと

よあけ

ある女の頸

野分

石切り出し



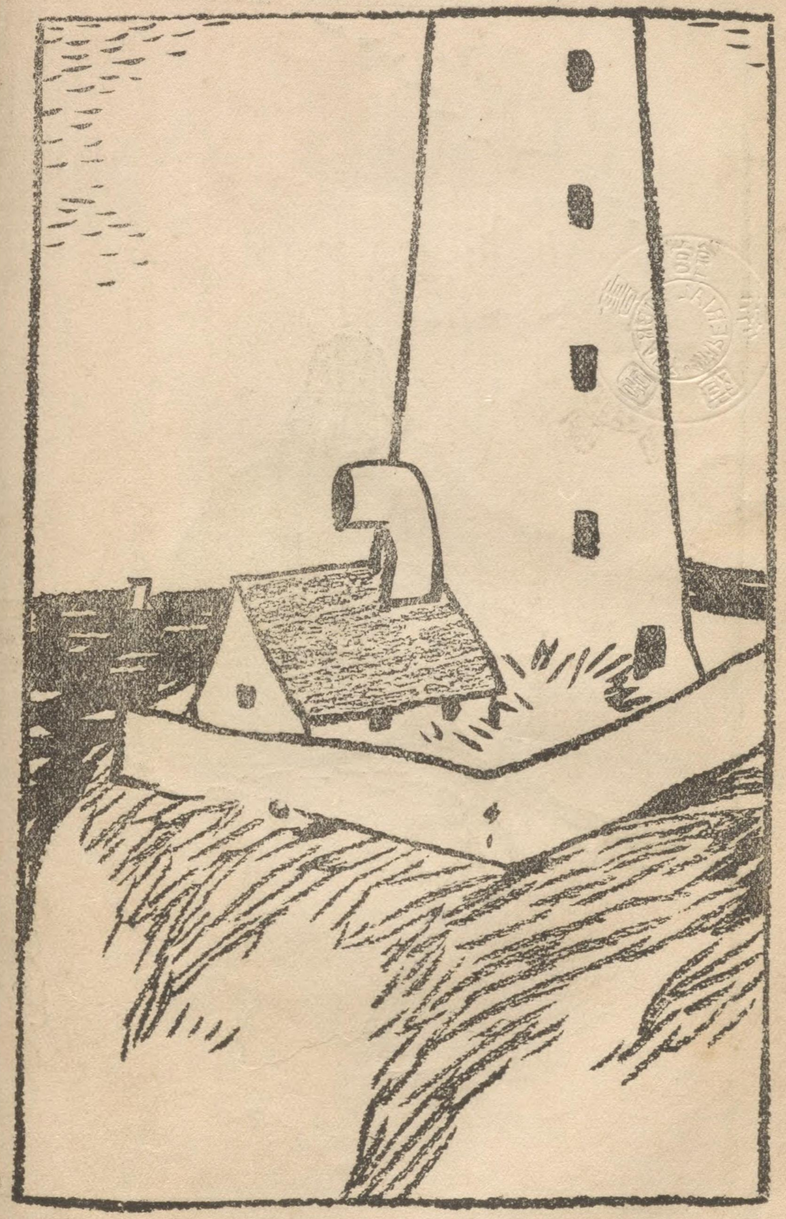
宇治の茶畑

つかれ

茶ばたけ

わたりどり

畑をたがやす男



犬吠岬

六月の夜の唄

あやの滝

山のはたけ

エヂプト模様

瓦運び

夜をまつ人

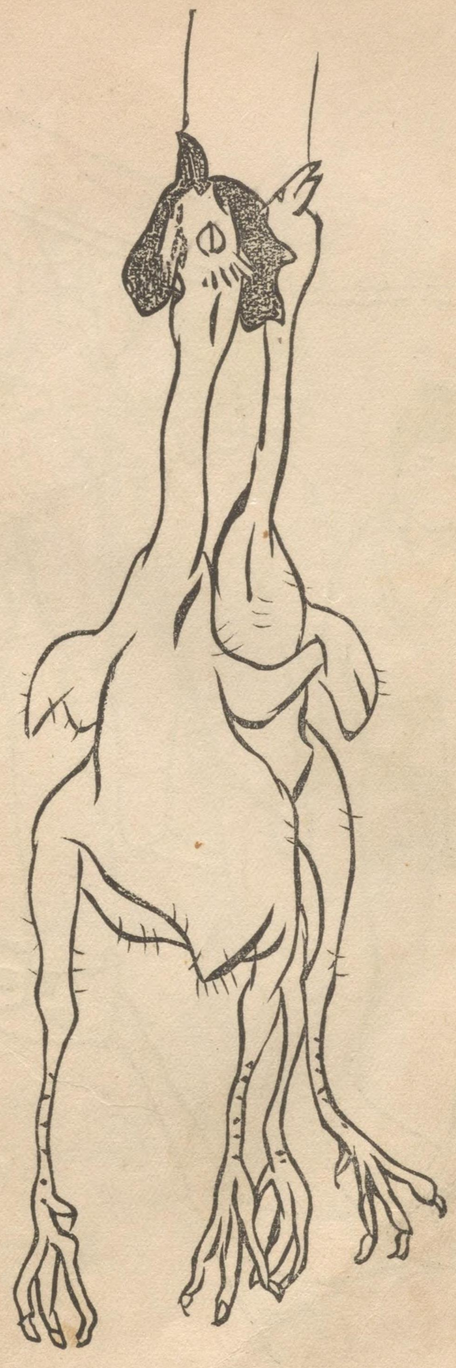
川ぞひの家

いけのはた

入り海

文楽座の楽屋

たばこをのむ人



死んだ鶏

大坂のある女

啞の子

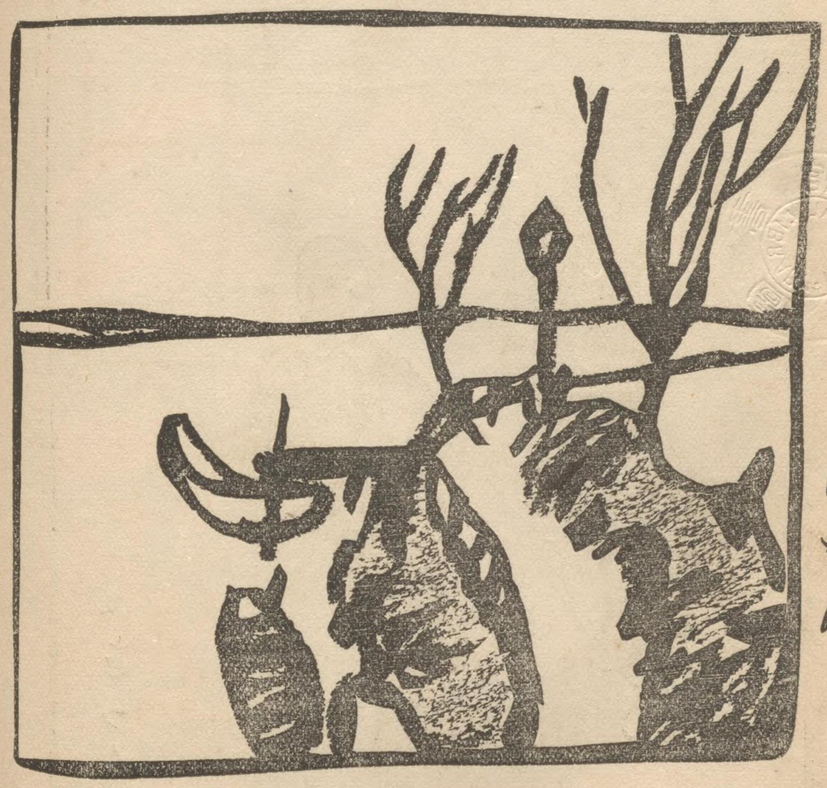
人形芝居

SHINAGAWA

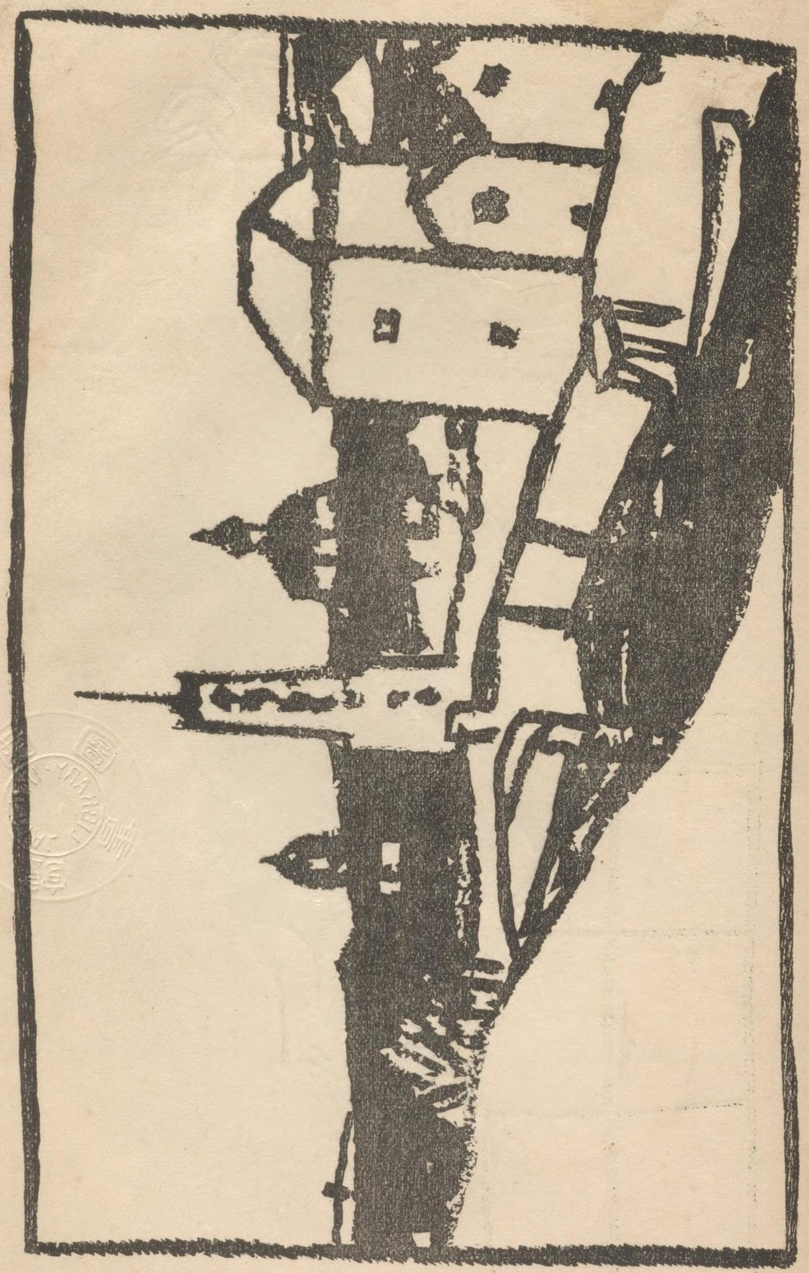
源氏山即をきいてゐる人

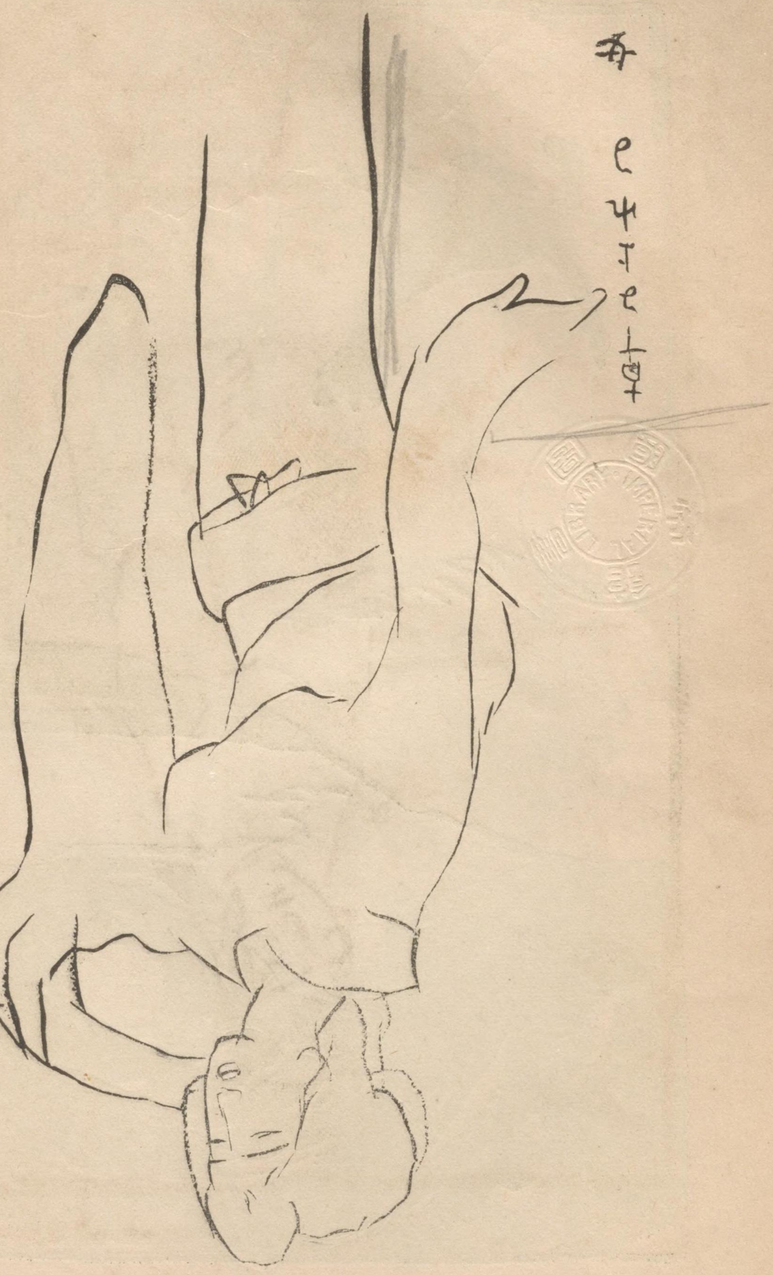
ガラスをつくる男

まってゐる女

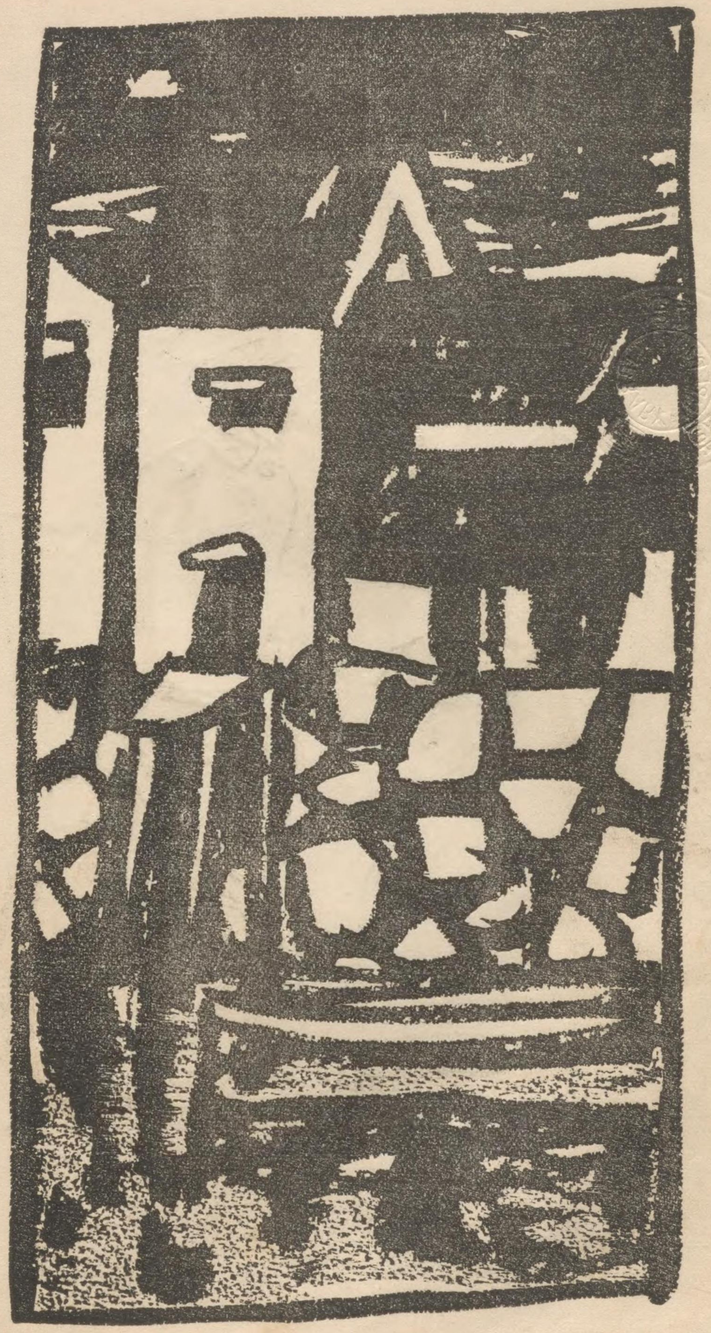


宮坂川



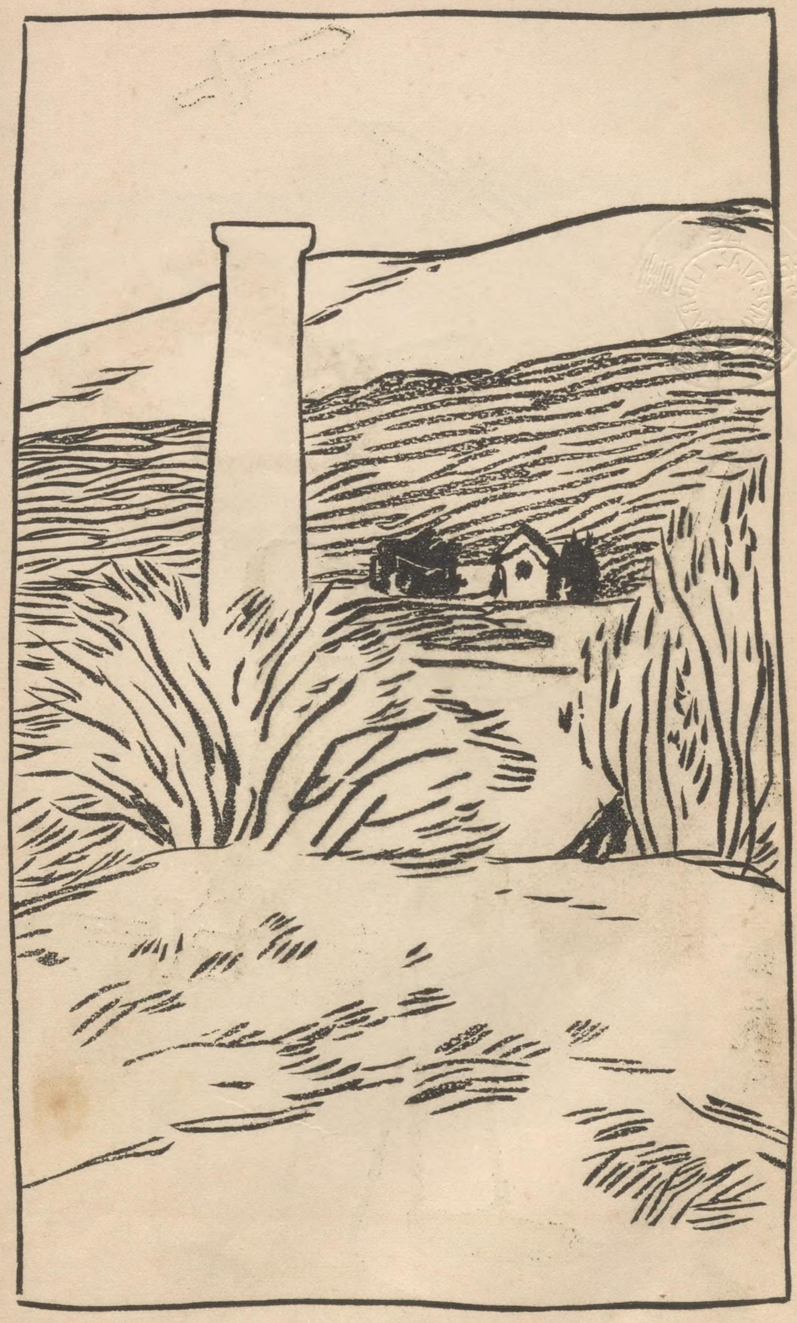


縁談を占てゐる男



支那人の曲芸

燒き場の烟突



漁師の妻

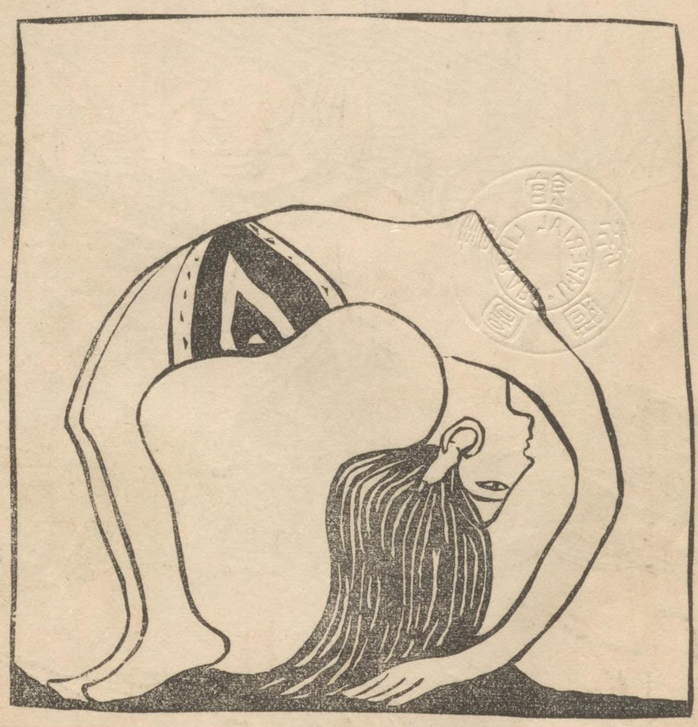
海ちかき村

收穫

かみそまく男

くさとり

滿州の皇族

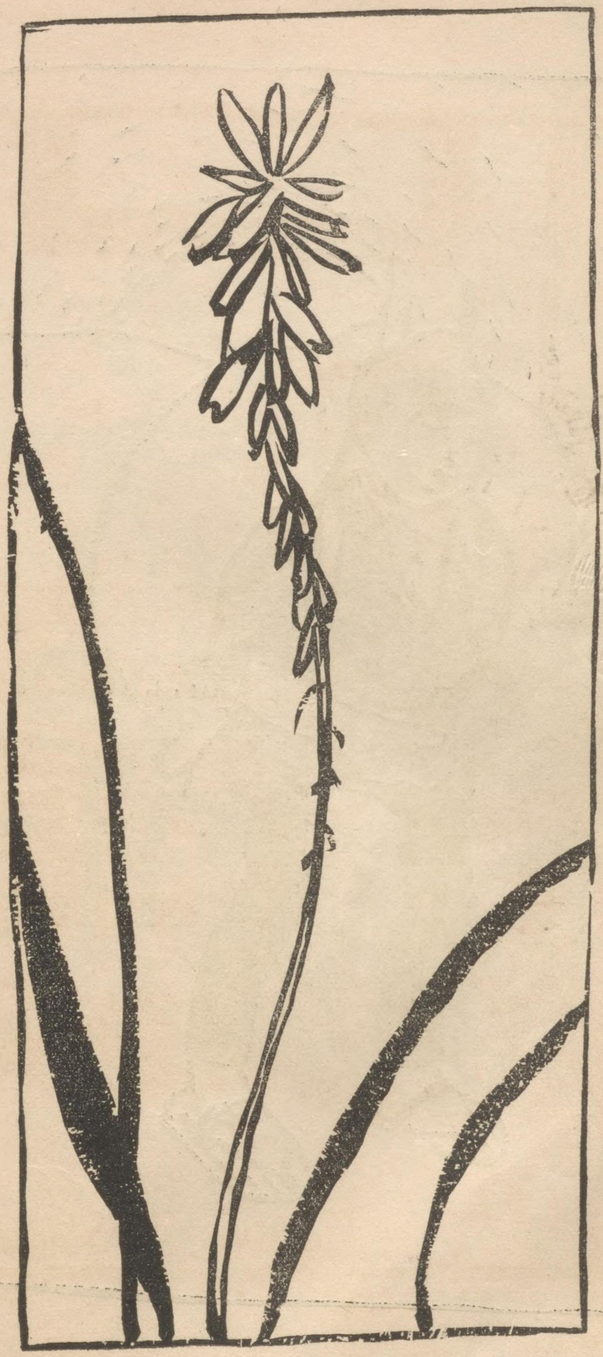


エヂプトの女の繪

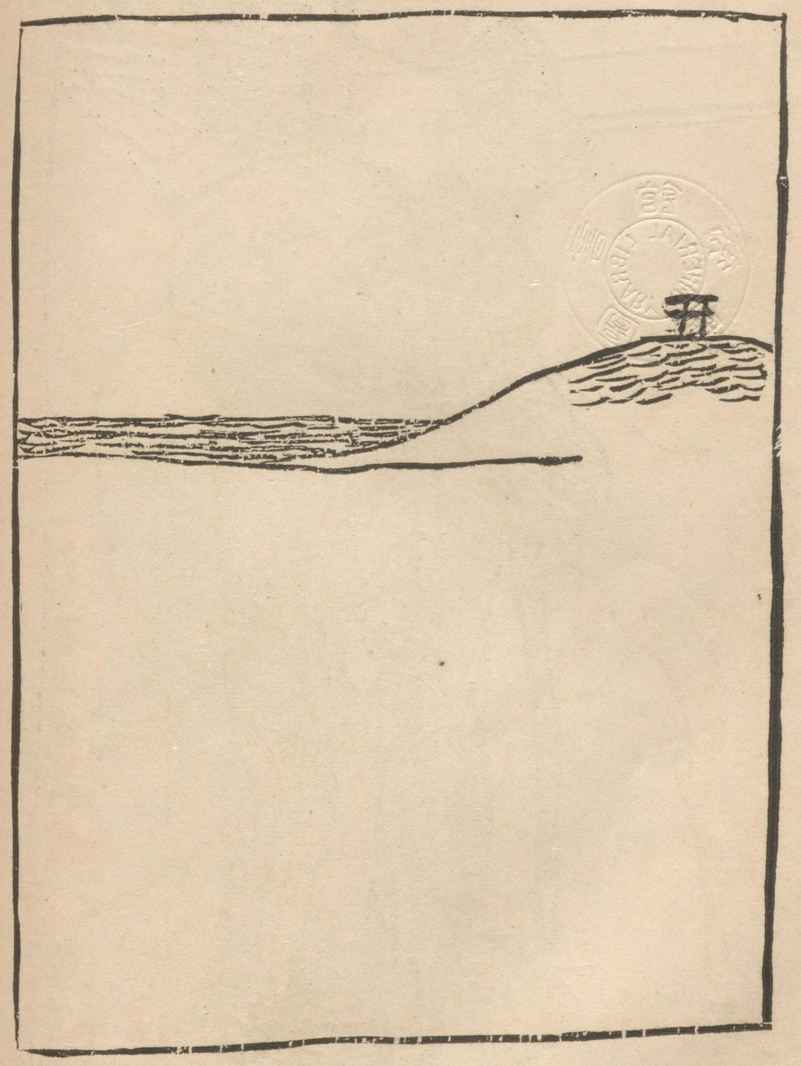
野からの男

おしばい

夜の停車場



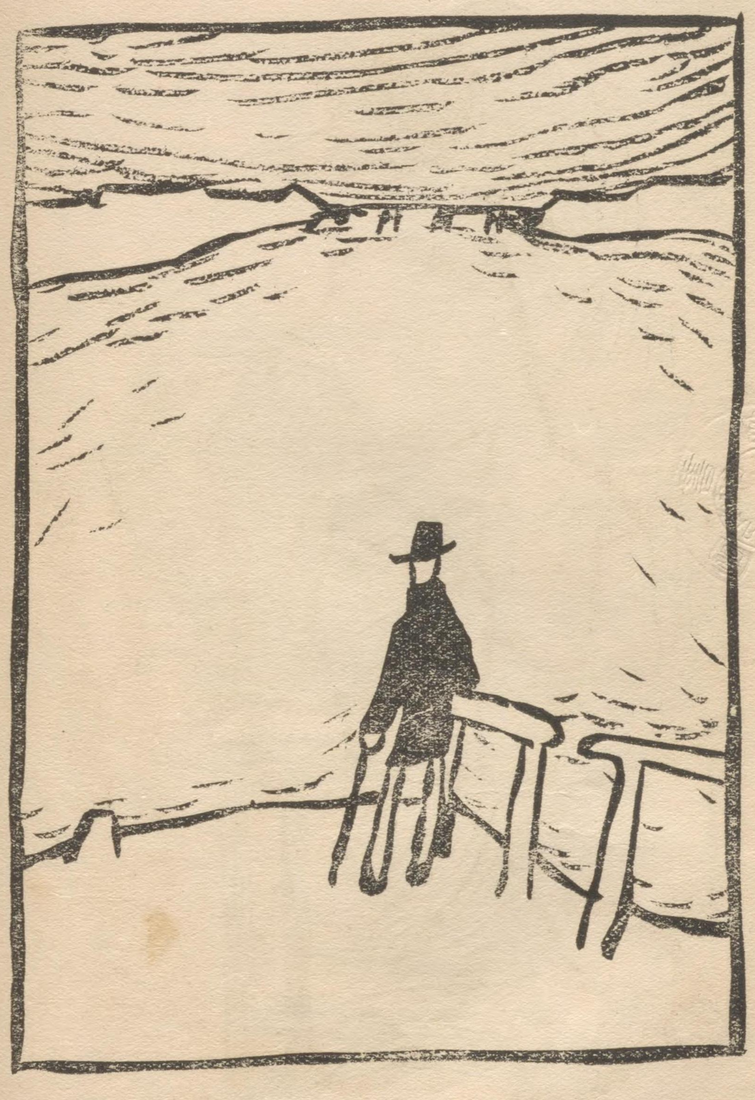
蒼さき。町へゆく娘



不幸だとおもつてゐる女

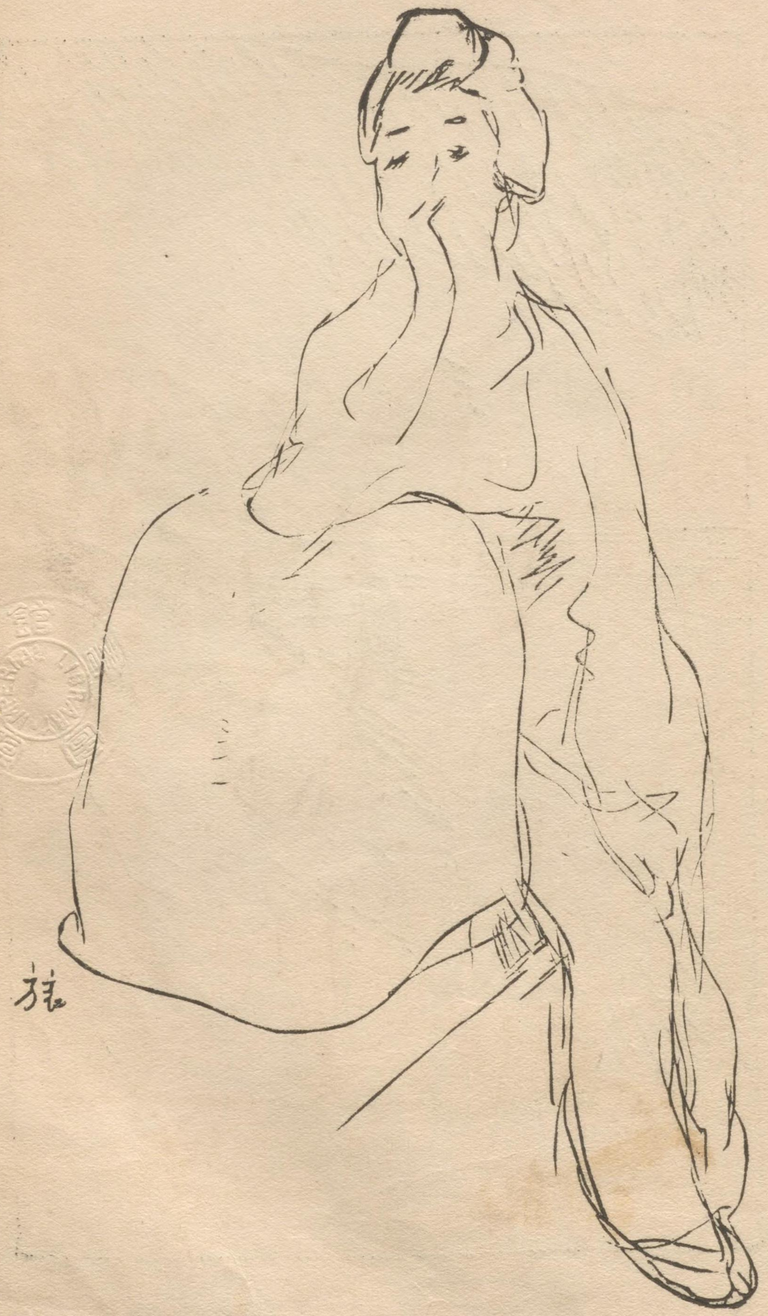
午後のひと日

あさん

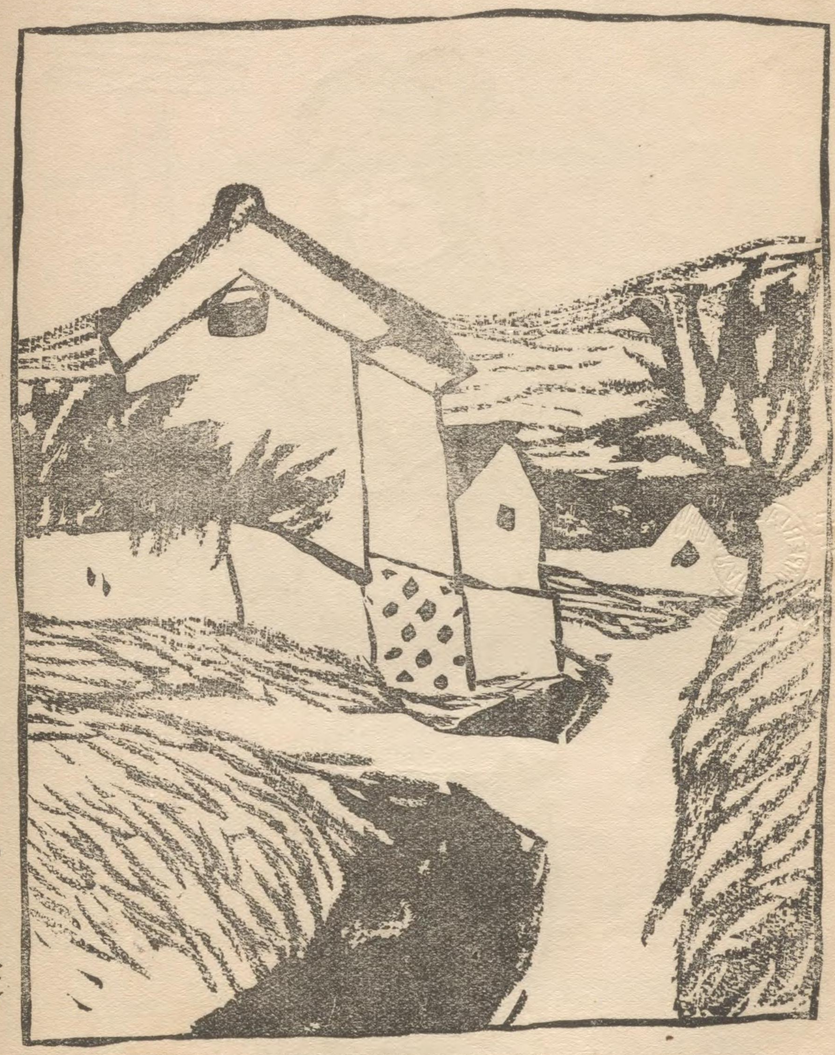


ゆうやけ

雪のふるけはひ



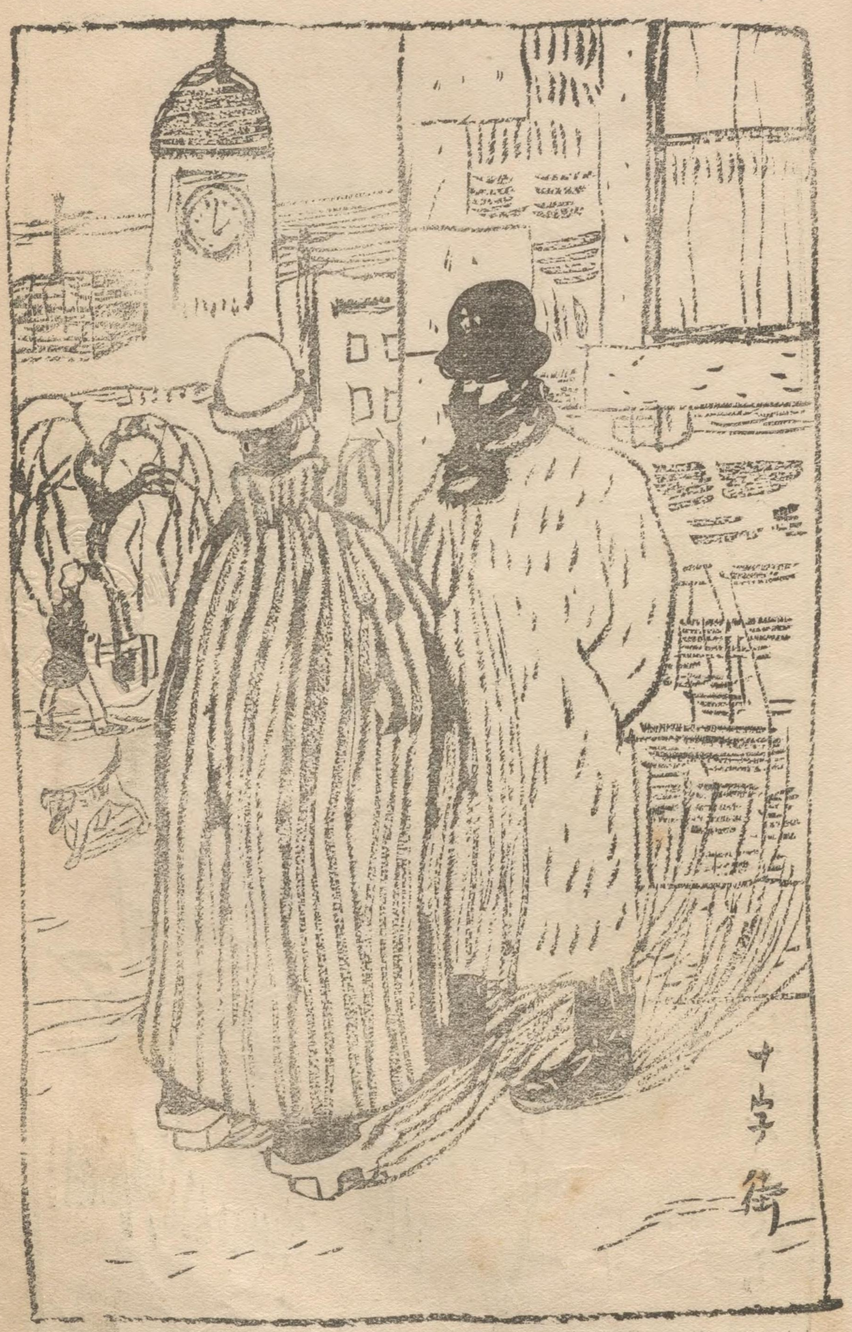
旅

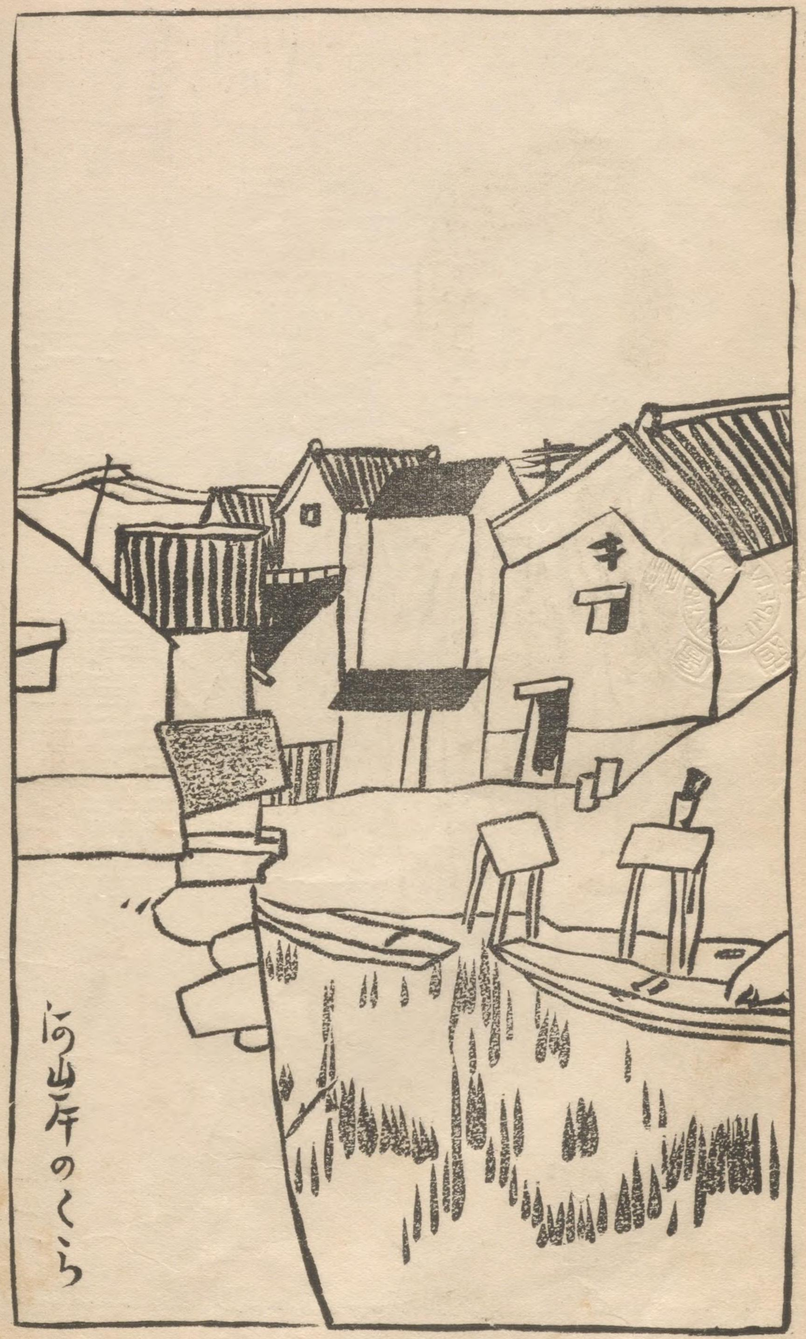


小径

頬

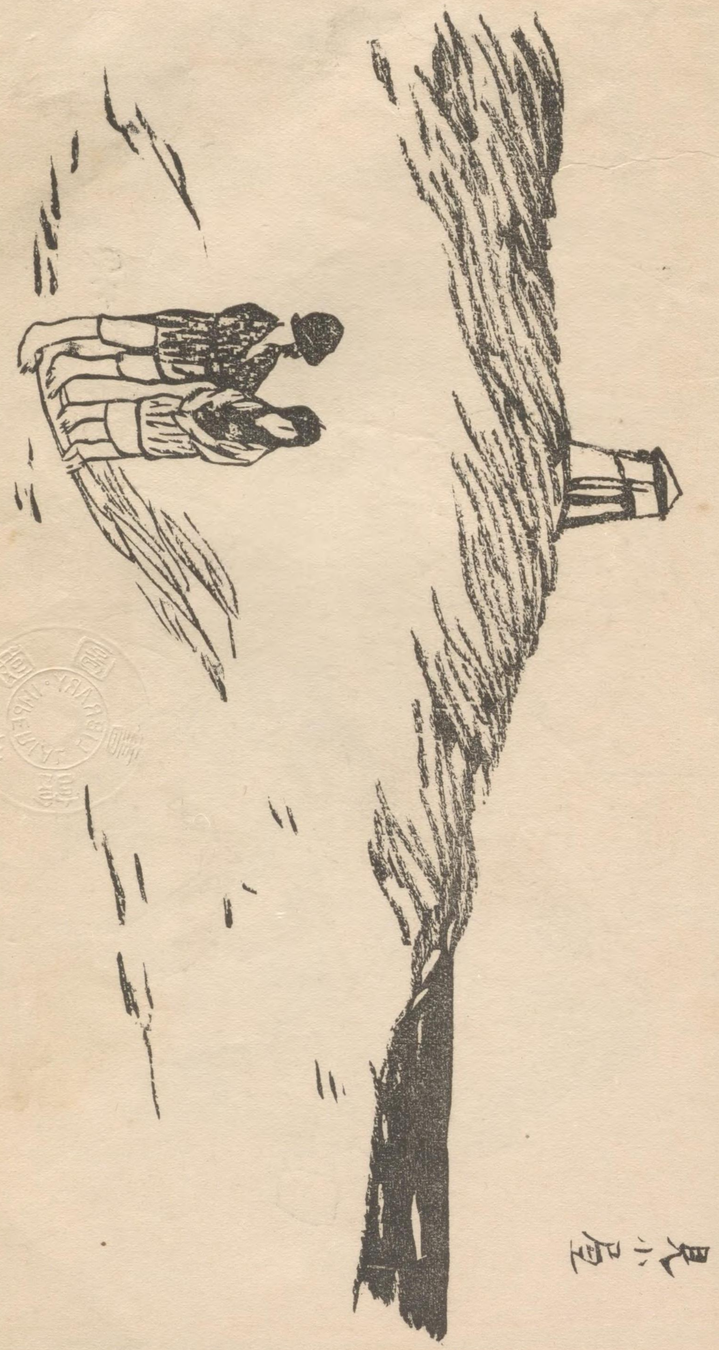
海そひ



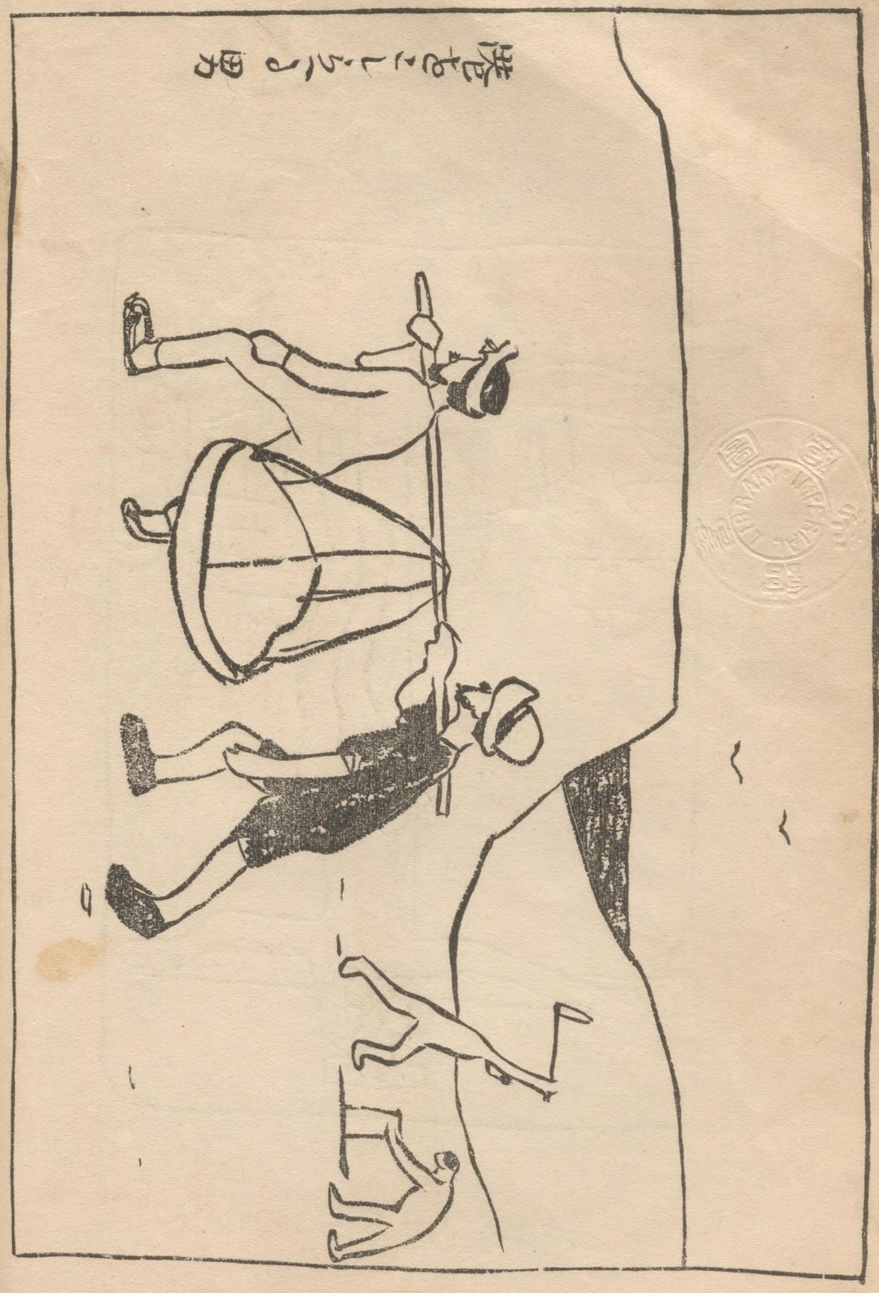

この山斥のくら

旅従者

あかいたそかれ

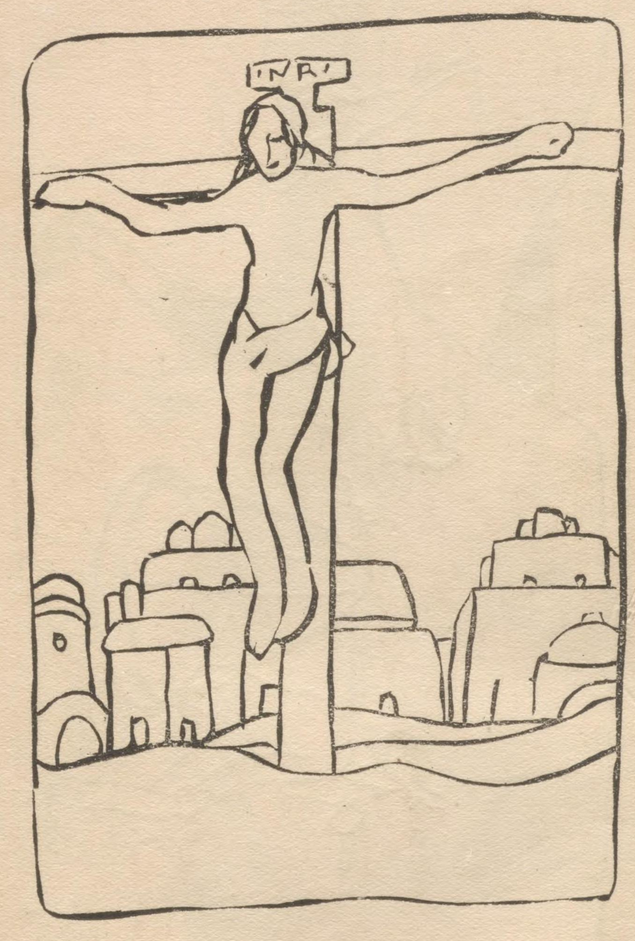


兎見小屋



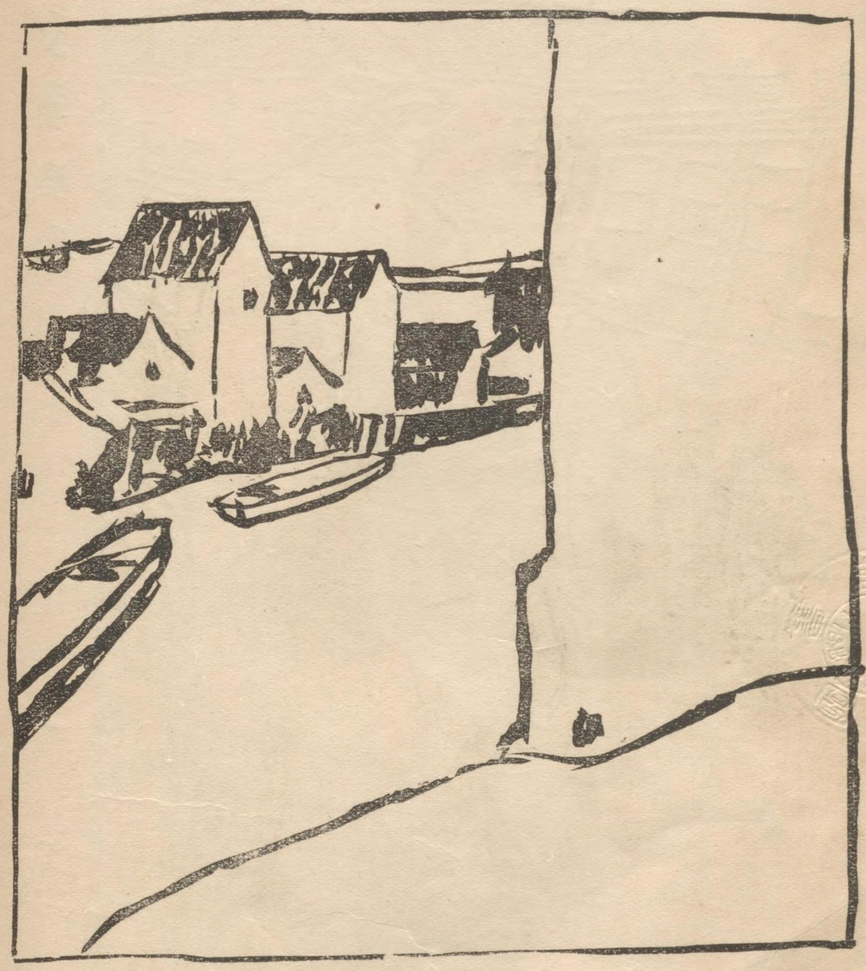
猟師小屋の留守

老いたる異国人



跡絵

ホール



メキシコ人の見合ひ

まち出づね

電車を掃除する男

海のほとり